



自分のものへのこだわり

## 牛山佐智恵

十二月初め、珍しく年長組のRが、「遊ぼう」と事務室の私のところへやってきました。

年中組のときには「夜まで一緒に遊びたい」とよく言っていて、私を笑わせた子でした。夏には砂遊びを、水遊びを、秋には毎日のように近くの空地に虫採りに出かけた私の遊び仲間でした。

その夏のこと、プールの水を張りかえていると、少したまった新しい水に、Rは四つんばいになって顔を入れ

ました。そして「まだ少し砂が残っている」と私に告げては、また顔を沈めています。そのうちつい夢中になったのか、腰までザンブリ水の中へ——あわてて口をついて出たのは、「おれ、パンツ十枚ある」でした。ところがRの着替え袋には、どう捜してもパンツは一枚もありません。自分のでないかどうかどうしてもいやだと言って、その日はズボンだけで帰っていききました。

虫採りは、カエルの時期から刈り入れどきのカマキリまで。ことにカマキリは、男の子たちの人気の的でした。まるでその体そっくりの葉を選んで身をひそめているようなカマキリ、見つけるには、かなりの集中が必要です。Rは目を凝らして見、メキメキ腕を上げていきました。カマキリにはこの上なく迷惑な時であったでしょうが、子どもたちには、自分の手で自分のものを得ることのできるワクワクする時間でした。Rの帰宅は、いつもその日の獲物と一緒にでした。

そんな去年と比べると、この秋は虫採り熱も峠を越えたとみえ、Rからもそう同行をせがまれることなく過ぎ

てきました。

ところで、そのRが久しぶりに「遊ぼう」と言うので、私は外遊びに誘われたものとはかり思っていました。ところがRは「ここで本を作る」と言い、同じ大きさに紙を切っていました。それからその一枚を出して、「ここに『ほん』と書いて」と言います。すぐに私はその部分に「ほん」と書いたのですが、Rはどうも気に入らなかつたようで、「こうじゃないの」と言います。けれども書き直すようには求めず、「名前はおれが書く」とペンをとりました。私には、Rが何となくさびしげでイライラしているように見えました。

あまり満足のいかない「ほん」を手にしたRと保育室に行き、しばらく一緒に過ごすことにした私は、これまではどこか様子の違うRを見ました。

私を知っているRは、欲しいものがあると、まずそれを手に入れることに関心を示す子でした。よほど自分のものに余裕のないかぎり、友だちとやりとりを楽しむということはありませんでした。手に入れたものが小さけ

れば、それはしばしば口の中に入れられました。これは今も変わりなく、Rの口にはビー玉や輪ゴムがしょっちゅう入っています。また、どんなときにも、誰に向かっても、堂々と「ちょうだい、ちょうだい」と要求しました。相手から無理やり取り上げるといふことはしませんでしたが、ねばって率直に要求を続ける子でした。

ところでこの日のRは、保育室でも「ほん」作りを続けました。広告紙の商品の写真を切っては貼りつけていくのですが、時折、近くにいるMの様子を見ています。Mは、板に釘の頭を少し残して二列に打ちつけ、その間を通路にしてビー玉をころがして遊んでいました。Rの関心は、どうもMのビー玉遊びのようでした。そうか、というわけで、私はMの方に近づき、それとなくRの様子を気にかけていました。ところが、Rは私と一緒に来ませんでした。しばらくすると部屋の隅に行つて積木を並べ、自分のまわりをぐるっと囲みました。「自分は自分」という懸命なものをRに感じて、私ははたと立ち止まりました。

数日後、Rはティッシュペーパーの箱をかたわらに置き、ほんのちよつとの移動でも、その都度「あつ、あれは……」とその箱を気にしながら遊んでいました。

このとき、Rは私と会うなり、前日のことを話してくれました。それは、初めて抜けた歯のことでした。

Rの抜けそうな前歯に、おとうさんが糸をかけたこと。「いやだ、いやだ」と騒ぐうちに、おかあさんが持っていた糸先がRの歯を引っばる形となつて、あつという間に抜けてしまったこと。

「それで、抜けたとき、どんな気持ちだった？」と聞く私に、「痛くなかつた。スツとした」とRは言い、歯の話はそれでおしまいになりました。ですから、絶えず自分のそばに置こうとしている箱の中に、いったい何が入っているのか——それを聞き出すまで、その箱の中のものごまかさかRの歯だとは思ひもせませんでした。

しかし考えてみれば、Rにとってその歯は、抜け落ちるまでは自分の体であつたもの、そばに置いていて不思議はない気がしました。Rはそれを四日ほど大切に持ち

歩き、家族の誰にもさわらせなかったといいます。そのうち、置き忘れてなくしてしまったようでした。

自分の一部にこれだけこだわりをもったRを、私はこの子らしいと思いました。そして、自分をこのようにして大事に確かめていく子どもの心持ちに、なぜかなつかしいような思いがよぎったものでした。

冬休み明け、Rはまた積木でおうちを作り始めました。この日はもうひとり仲間がいて「お店にしようか」などと楽しげでした。一応囲いができる、Rは真中に一つ積木を置き、「ここに座ってて」と私を招き入れました。

このとき、Mはまたビー玉ころがしをやっています。ところがRのおうちを見ると、ビー玉よりはおうちで遊びなくなったらしく、「その積木、貸して」とRに言いました。すると、Rはすぐさま「ビー玉くれたらね。その積木だけだったらいいよ」と、積木の一部とビー玉との交換を要求しました。

Rは、自分の持ち場で自分の遊びをつくりながらも、

望みのビー玉をこのときまで待っていました。これで、ひと月前のこの子のいらだちは、この子自身の手で解かれたことになりました。それを見とどけることができ、私は、「Rは大きくなったな」と思い、「やっぱりRだな」とも思いました。

一年を経て私がこの子にみたものは、自分のものへのこだわりが、単にこだわりが終わらなかったことでした。それは、自分は自分として、友だちは友だちとして、互いの間に「大事なものを認めていくものになったように思います。Rがそこで、悲しみやいらだちに揺れたことを、私は大事に胸に留めておこうと思います。

(長野幼稚園)